

沖縄芸能芸術祭 2006

～ 沖縄の原風景から現風景へ～



趣旨：

沖縄芸能芸術祭はさまざまな視点から沖縄に関心を持つ者同士のネットワーク形成のひとつの拠点となるべく、今後の定期的な開催を予定しながら初回となる今年度の開催を迎えます。若手沖縄研究者同士ならびに研究者世代間の相互交流を計りながら沖縄研究全体の活力を支援することを目標し、一方で、芸能芸術祭の企画を通じて沖縄現地との関わりも深めながら沖縄研究のネットワークを大学という枠組みにとらわれないものにしてゆけるような場所作りを行なってきたいと考えています。

初回となる本年度の沖縄の芸能芸術祭は、研究所のプロジェクトのひとつでもある「沖縄の古典文化と現代文化」の一環として、それらのあいだに息衝くダイナミックな文化の交流をテーマにした映像を上映します。上映は本会場とロビー特設スクリーンの二ヶ所で行なわれ、ロビーでは自由に言葉を交わしながら映像を見ていただくことが可能です。戦前・戦後の沖縄を捉えた貴重なフィルムと今日の文化芸能の映像資料の両方を一堂に会し、沖縄文化の広がりとお興行きを自由に行き来していただける場を用意しています。

7月7日（金） 10:00 - 20:00 早稲田大学小野梓記念講堂 入場無料

主催：早稲田大学 琉球沖縄研究所

<http://www.waseda.jp/prj-iros-waseda/>

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学9号館9階アジア研究機構

協力：NPO 法人前島アートセンター

沖縄県立公文書館

上映作品一覧

「南の島・琉球」東京日日新聞社製作（製作年度不明、昭和初期）

「体育行脚」製作者不明（1929）

「河村只雄記録映像資料」（1937） - - - - 民俗学者河村の「南方文化の探求」の映像、無声

「琉球の風物」「琉球の民芸」日本民芸協会制作（1939）

「沖縄」東京日日新聞（1940）

「海の民・沖縄島物語」東京発声映画（1942）

「米軍が捉えた沖縄戦映像」 - - - - 無声、カラー

「護佐丸誠忠録」（1934） - - - - 沖縄県産初の劇映画、琉球王朝の謀反劇、活弁録音

「吉屋チルー物語」金城哲夫

「女が男を守る島」

「チェンバレンの厨子糞」港千尋（2005） - - - - 厨子糞を巡るドキュメンタリー

「Wanakio 2002」「Wanakio2003」前島アートセンター（2004） - - - - 沖縄現代芸術プロジェクトのドキュメンタリー

「カッチャン ～還暦越えのロックンローラー～」琉球放送（2005） - - - - 沖縄ロックのドキュメンタリー

「Electric Sanshin ～沖縄・文化のチャンプルー～」ロイク・ストウラーニ（2005） - - - - 沖縄現代文化のドキュメンタリー

「流転沖縄～沖縄1300余年の歩み」東京・沖縄芸能保存会（2006） - - - - 舞踏、記録映像

「夢幻琉球つるヘンリー」高嶺剛&市民プロデューサーシステム（2004）

- ・ 上映作品は今後追加される場合があります
- ・ 休憩時間には一般公募の短編映像と沖縄企業のCFも上映

タイムテーブルは現在調整中です。

調整を終え次第、<http://www.waseda.jp/prj-iroos-waseda/>上にてアップロードします。

上映作品一覧

カッチャン ～運層越えのロックンローラー～

制作 / 琉球放送 2005 60分

70年代、沖縄、ベトナム戦争の前哨基地として戦地に赴く米軍兵士たちを相手に生まれた沖縄ハードロック、その中でもカッチャン率いるコンディション・グリーンはひとときわ卓越したステージパフォーマンスで一世を風靡していった。そのシーンが勢いを失ったかに見えた米軍のベトナム撤退以後も、一人の表現者が音楽活動を止めることはない。カッチャン本人や映画監督・高嶺剛、音楽プロデューサー・喜屋部幸雄へのインタビューを通じて沖縄ロックシーンの成り立ちを回想しながら、70年代のコザの街が生んだひとつの文化が現在へと息衝いていく軌跡を丁寧に描き出す。

Electric Sanshin ～沖縄・文化のチャンプルー～

監督・撮影 / Loic Sturani 2005 49分

出演：

石川真生、今井照光、上原知子、カッチャン、儀間比呂志、金城久美子、杉本信夫、照屋林賢、中江裕司、名嘉太一、名嘉睦稔、登川誠仁、宮永永一、山城知佳子、ほか

イタリア人とフランス人との間に生まれた現代芸術家ロイクによる沖縄の現代文化のドキュメンタリーは、建築・写真・音楽・美術・料理というように縦横な視点で現在の文化状況を捉えてゆく。とりわけ沖縄の音楽文化の広がりや繋がりとを、伝統民謡から電子音楽まで、かつてないほどに広範な視点から映し出している。表現者たちへのインタビューは紅型のアニメーションによる動物たちとの小旅行として構成されており、独特のナレーションと編集によって沖縄の現代における文化の混合状況から文化という現象一般のハイブリディティが提示される。

吉屋チルー物語

監督 / 金城哲夫 1961 45分 (前半のみ)

ウルトラマンの生みの親で知られる金城哲夫が、あのウルトラシリーズを手がける前、23歳のころに自主制作した全編ウチナーグチ(沖縄口)による映画が「吉屋チルー物語」である。ロケーションの全てを沖縄で行ない、また出演者も全員沖縄芝居の役者を起用して作られたこの映画は、長い間人目に触れることのなかった幻の映像である。今回はオリジナルフィルムの保存上の都合

により、前半のみの上映となります。

女が男を守る古代の島 沖縄・久高島の1年

監督 / 北村皆雄 撮影 / 柳瀬裕史

制作 / ヴィジュアルフォークロア 1983

久高島は、12年に1度おこなわれる女性の祭りイザイホーで知られる島である。しかしイザイホーは廃止、年間30を越える祭りも、消滅、あるいは形を変えて、わずか数人の女性によって、担われているだけである。この映像は、祭りがまだ生き生きと島の生活を支えていた24年前の1982年～3年に撮られたもので、家族、男兄弟を守る役割を担う女性の祈りを、女性に護られる男性の人生を重ね合わせて描いたものである。沖縄の信仰の基層を知ることのできる作品。

チェンバレンの厨子甕(ずしがめ)

監督 / 港千尋 2004 60分

2004年、60分、ビデオドキュメンタリー、港千尋監督作品。オックスフォード博物館に、1894年にバジル・ホール・チェンバレンが寄付した立派な陶器の骨壺「厨子甕」がある。ラフカディオ・ハーンの友人で、日本語研究と日本学の先駆者として有名な彼がなぜ、琉球でしか使われていない骨壺を、はるばる英国まで送り届けたのだろうか。ビデオカメラをもった現代の旅人が沖縄を訪れ、民俗学、考古学、人類学、芸術などさまざまな分野における「死者の扱い」に触れることで、なぜわたしたちは過去を記録し、記憶を保存するのかという深い問いの答えを探ってゆく。カメラには、沖縄の強烈な光と潮風のなかで、およそ100年前には考えられなかったような風景が映し出される。

舞踊劇「流転沖縄」～沖縄1300余年の歩み～

制作 / 東京・沖縄芸能保存会

作： 児玉清子(1914-2005)

演出： 八田元夫(故・新劇界の巨匠)

“基地のない平和への悲願と青い海が赤い海に変わらぬように。本土復帰34年目を迎えた現在、尚、島の精(心)は訴える。”

沖縄本土復帰の1972年に初演され、1973年、1992年(松川暢生・

演出)と再演された沖縄の平和を祈願する舞台の映像記録。

『流転沖縄』は、プロローグのある二幕十場にわたる美しい舞踊劇の形式で、沖縄の昔から今日までの歴史と、沖縄が荷ってきた運命を、まことによく画いたものであり、それに対する鋭い批判、同情あり、本土に復帰した今日、そして将来、沖縄は如何にあるべきかということ、その展望と、女史(児玉清子)扮する「島の精」の演技とによって、微妙に、また情熱をこめて暗示している。」(本田安次『流転沖縄について』1973)

夢幻琉球つるヘンリー

監督/高嶺剛 制作/市民プロデューサーシステム

1999 85分

民謡歌手・つるは、行く先々の思いついた場所でゲリラ的にラジオ放送を行いながら、高等弁務官との間にもうけた息子・ヘンリーと共に、台湾に出奔してしまった昆虫学者・銘苅(メカル)に代わって「ラブーの恋」を映画としてつくり上げようと試みる。その過程においてヘンリーは、高等弁務官を父に持ち、アメリカに留学した際、CIAによって記憶を消されたという経緯を持つ映画の主人公・ジェームズに自身を重ねて見るようになってゆく。

複数の時間軸と空間が交錯する中で、沖縄の過去と現在がアトラダムにコラージュされ、現実と幻想がレトリカルに転置を繰り返す。物事に対する計量的感覚が逆転した中で共同体の物語が描出されている作品である。観るごとに異なる作品像が立ち現れ、断片的に描出されている事象の全てをつなぎ合わせても完全には全体像を把握しきれない。それが「つる・ヘンリー」の魅力と言えるであろう。

本作品の製作にあたった市民プロデューサーシステムは、市民の連携を軸に映画を作家と共に文化的財産として製作し、上映権等の権利をも含め、作品を作家と各プロデューサーの共有物として管理を行うという、従来の商業映画の作り方や個人、公共団体の製作形態とは違う映画製作のシステムに則った製作スタイルをとっている団体である。

南の島・琉球

制作年不詳 11分 白黒無声

朽ち果てた首里城や壺屋南又窯(ふえーぬかま) さーたーやー(戦前の製糖工場)辻の尾類馬(じゅりうま)行列、村芝居、八

ブ、制作は昭和2・3年頃と推定される。おそらく最も古い映像と考えられる。製作は東京日日新聞と大阪毎日新聞。『異文化の地』沖縄のルポの第1号ともいえよう。

体育行脚

1929年 40分 白黒無声

沖縄関係の映画作品の内、最も古い作品。制作は昭和4年(1929)しかしこの作品には正式タイトルも製作者名も記されていない。体育行脚という仮のタイトルがフィルムの耳にあるのみだ。西表島炭鉱からの石炭積み出し風景など貴重な近代沖縄の風景が撮影されている。体育普及の様子は微塵も無く、沖縄列島の映像記録フィルム。制作に「朝輝」という名前。

河村只雄民俗調査映像

1937年 45分 白黒無声

民俗学者河村只雄は昭和十一年から5回にわたる民俗調査で来沖、映像は1937年当時の際の映像。那覇東町市場、闘牛、波之上プール、今帰仁祝女殿内、綱引き等貴重な民俗資料映像。参考文献『南方文化の探求』(1939年初版・1999年講談社学術文庫版)

琉球の焼物

琉球の風物

1939年 計22分 白黒ナレーション込

民芸運動を提唱した柳宗悦らの沖縄入り葉1938年から40年の4回。「琉球のおくゆかしさ、驚くべき芸術性」と沖縄の文化を評した。糸芭蕉の芋引き(うむびき)から琉球絃に至る過程など、陶器や染織などの記録映像として貴重な。柳と式場隆三郎が共同監修。組踊や空手も記録されている。

沖縄

1940年 15分 白黒

鉄道や那覇港等の風景など産業の発展も記録された映像。日本の移民の約8割は沖縄からだとも指摘、日本の生命線だとも。泡盛や文化についても触れているが、事実誤認の見つかる作品でもある。東京日日新聞、大阪毎日新聞の製作。